

母の730 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

道草日記⑩〈最終回〉／大野八生 2

1945→2025 そのさきへ② 平和と向き合う、問いつづける

／林田光弘 3

絵本とともに育ち合う子どもたち／徳永満理 4

新刊紹介／嶋田泰子、はたこうしろう 6

あのことこのこと／石川えりこ 7

イラスト／はたこうしろう



4歳児のトマト論争——幼児に育つ対話の精神—— 加藤繁美

自分たちで育てたトマトの調理法をめぐって、4歳児の保育室で繰り広げられた話し合いの場面を、ひとりの保育者が語ってくれたことがあります。大半の子どもがスープを希望する中、カイ君だけが「絶対にジュース」と主張し、話し合いは平行線。「スープを作ってもらって、飲みたい子だけジュースを作ってもらおう」というナツミさんの提案で丸く収まると思ったものの、カイ君は「絶対にスマイレ組の全員と一緒にジュースを飲みたい」と主張したと言うのです。

さすがに嫌いな子に強要するのはいかなものかと、「なんでイヤな人も飲まなきゃならないの？」と聞いた保育者に、今度は「みんなで飲むとおいしいはずだから」とカイ君。そんなカイ君の思いを受けて、「お家でひと口飲んでその味が苦手だったから、私は飲めない！」と言っていたアミさんが、「ちょっとだけなら飲んでみようかな」と自分の考えを変更するのです。そしてスープ派だったナツミさんの、「ちょっと飲んでダメなら、もう飲まなくていいんですよ」という質問に「うん、ひと口飲めばいいよ！」と返したカイ君の言葉で議論の風向きは一気にジュースに傾きかけたのですが、そんな中、いったん「ジュースでいいよ」と覚悟を決めたアミさんが、思いつめた表情で語り始めたと言うのです。

「あのさ、さっきジュースでいいよって言ったけどさ……やっぱり……！ どうしても飲めないって思ったの。あとあと考えたけど、やっぱりイヤだったのよ。苦手なもの、誰だってあるじゃない？ 私のママはゴキブリが苦手だね。無理に近くに行かないでいいと思うし。それをいけないことだとは思わないの。でも、ジュース飲まなきゃいけないんだって思ったら、つらい！ つらすぎる！」

アミさんの言葉を聞いて、「どうしてもジュースを飲みたくない子は飲まなくてもいいよ」と今度はカイ君が自分の考えを訂正したのだと、この保育者は話してくれました。人間の中に形成される「対話的精神」を、「異なる価値観を持った人と出会うことで、自分の意見が変わっていくことを潔しとする態度」と語ったのは平田オリザさんでしたが、自分の思いをあいまいにしないでだけでなく、相手の思いにいていねいに耳を傾けて自分の考えを訂正する、そんな4歳児の潔い姿に、対話する「市民」のあるべき姿を教えられた気がします。

(かとう しげみ／山梨大学名誉教授)



道草日記 11

大野八生

(イラストレーター・造園家)

野の花プランター

あ

るお店の小さなベランダにある、小さなプランター。お店は一か月のうち一週間だけ開きます。ふだんは誰もいないそのお店、植物たちが留守番をしています。

その場所にお店がオープンしたときから、植物たちのお手入れをさせていただいています。お店が閉まっている間、

植物を植えているプランターは室内で水を張った大きなタライなどに入れておきます。元々何も植えていなかった小さなプランターだけは、ベランダに置いたまま。すると、何も植えていなかったのに、野の花たちが芽を伸ばし、花を咲かすようになりました。私も花が咲き終わったら花がらを摘み取り、株が枯れたらそっと取り除くようになりました。土が減ったら少し足し、風で倒れそうだったら小枝で支柱をして。いつも草花たちにしてはいるお世話を、野の花たちにも。

そんなことを繰り返しているうちに、そのプランターは小さな野原のようになってゆきました。単純に見ると、何も植えてないプランターに草たちが生えてきた様子なのですが、庭師の私としては、小さなプランターに、たまたま行き着いた命を大切に育ててみたかったのです。

毎年芽を出すもの、その年だけのもの。季節により、顔ぶれもまったく違います。小鳥が運んできたもの、風で飛んできたもの、何かの土に入ってきたものなど……。まったくわからないところも、不思議で楽しいのです。一か月の間、お店が開いている一週間だけの水やりで、あとはときどき降る雨を少し、朝露だけ。こんな条件の中でも、月のはじめにお手入れに何つと、プランターの中の小さな野の草たちは、機嫌よく元気に花を咲かせたり、種をつけたりしてくれているのです。もしかすると、何か特別な魔法がかかっているのかもしれない。

春はスミレ、タンポポ、ハコベ、ナズナ、スズメノカタビラ、カタバミなど。夏までの間、小さな命がそれぞれ元気に花を咲かせます。次の季節、小さなプランターはどんな景色になるのでしょうか。

(おおのやよい)

1945→2025 そのさきへ 平和と向き合う、 問いつづける ②

戦後80年。平和を築くために、
わたしたちはどう行動すべきでしょうか。
さまざまな立場、分野において、
平和に向き合い、問いつづけている方々に
1年間にわたりお話をうかがいます。

「平和の原点」を想う

林田光弘

(一般社団法人Peace Education Lab Nagasaki代表理事)

「平 す」

和の原点は、人の痛みがわかる心を持つことで

二〇一〇年四月一日に亡くなった長崎の被爆者、吉田勝二さんが必ず伝えていた言葉です。吉田さんが亡くなってから一か月後、当時高校三年生だった私は、核兵器に関する国際会議に参加するために渡米します。現地では、勝二さんの生涯を描いた紙芝居を英語に翻訳して高校で披露しました。もともとは、病気で入院されていた勝二さんを励まそうと練習していたものです。高校生たちは涙を流しながら紙芝居を観てくれました。

原爆によって全身に大やけどを負い、一年後に生還した勝二さんを待っていたのは、顔に残った大きなケロイドによる差別とのたたいの日々でした。勝二さんと一緒に道を歩いたとき、すれ違う人たちがじっと勝二さんのケロイドを見つめていたのをよく覚えています。しかし、私が知る勝二さんは「ケロイドがなかったらキムタクよりかっこよかった」と言って笑わせてくれる明るい人でした。今考えると、あの明るさは自分を鼓舞するた

めのものだったのかもしれませんが。

二〇二四年十二月、日本被団協のノーベル平和賞授賞式がオスロで開催され、光栄なことに参加の機会をいただきました。被爆者の田中照巳さんがスピーチを行っている最中、勝二さんを含む、お世話になった方々の顔を思い浮かべながら、この瞬間をとともにできなかったことの悔しさと同時に、一緒にいるような温かさを感じる不思議な時間を過ごしました。



写真中央が林田さん。
昨年12月に行われたノーベル平和賞授賞式にて。

はやしだ みつひろ 長崎・浦上に生まれ育つ。中学三年生の時に核兵器のない世界を求める高校生一人署名活動に参加して以来、平和活動が続いている。二〇一六年から五年間、ヒバクシャ国際署名のキャンペーンリーダーを務める。二〇二四年、被団協代表団の一員としてノーベル平和賞の授賞式に参加した。

授賞式から一か月後、人類滅亡までの残り時間を象徴的に示す終末時計が過去最短の「真夜中まで八十九秒」となったことが発表されました。この時計は、米科学誌「原子力科学者会報(BAS)」が一九四七年以降毎年発表しているもので、真夜中の〇時を人類滅亡の時とし、世界がそれにどれだけ近づいているかを示しています。BASは過去最短の理由として、ウクライナや中東における戦争や紛争で核兵器が使われるリスクが高まっていること、そして軍事標的の特定にA-1を組み込んだシステムが使用されていることを挙げました。

戦火の最中にある地域のメディアの発信を見ると、戦時中には相手は「敵」になり、同じ人間として捉えることができない状態であることがよくわかります。だからこそ、命を奪うという選択をA-1に委ねるといふことができてしまつたのかもしれませんが。他者を人として捉えることができなくなる、それは私たちの日常にも潜んでいる意識です。今は平和だからと油断せず、吉田勝二さんの言葉を心に刻み続けたいと思います。

私は、兵庫県尼崎市にあるおさなご保育園に、毎週絵本の読み合いに出向いています。この園は、〇歳児から五歳児まで、定員八〇名の保育園です。その各クラスで、その日の絵本当番の子が選んだ絵本と、私が選んだ絵本を読んでいます。昨年〇年の瀬、ふどう組（五歳児）の絵本当番のほのかちゃんが選んできた絵本は、『100万回生きたねこ』（佐野洋子・作絵／講談社）でした。

この絵本は九月に、ちなつちゃんが選んだ絵本でした。そのときのことです。絵本を読み終わって、「不思議な話やね」「なんで、生き返らなかったのかな」と子どもたちに問いかけると、「なんか、さみしいな」と返ってきました。「最後、なんでねこが泣いたの」と問うと、「白いねこが、動かなくなったから」と。そんな会話を交わしたのが、記録に残っていました。

二度目の読み合いとなったその日、今回はどんなふうになるだろうと、楽しみでした。

「100万年も 知らないねこがいました。」

子どもたちは、読み始めから、吸い寄せられるように絵本に見入っていました。

「ねこは もう、けっして いきかえりませんでした。」

絵本とともに育ち合う 子どもたち

子どもたちにとって、絵本とは一体どんな存在なのでしょう。
長年子どもたちと一緒に絵本を読み合ってきた徳永満理さんに、
子どもたちと絵本とのかかわりについてお話を伺いました。

徳永満理

（おさなご保育園理事長）

とくなが まり 子どもに寄り添う丁寧な保育を長年にわたり実践。社会福祉法人おさなご保育園園長を経て、兵庫大学短期大学部、兵庫大学、佛教大学、四天王寺大学などで講師を務めた。現在、おさなご保育園理事長。

読み終わると、みんな、ほーっと、肩の力を抜き、どの子も何かを言いたげなのです。でも、言葉にならず、ただ黙って、読み手の私を見つめるばかりでした。そこで、「もう一度、はじめから見てもうか」と言って、表紙、扉……と、一ページ一ページ振り返っていききました。そして、エンディングの、とらねこがしろねこを愛し、家族をつくり、最後は本当に死んでしまつというくだりにきたときでした。「しろねこ、かわいい」「とらねこ、しんだんや」「しろねこも」「とらねこも いきてる」など……。誰かが言うのと、それを受けて気づいたことを話したり、またそれを聞いてうなずく子がいたり。そんな、みんなのおしゃべりタイムが過ぎていきました。九月からの三か月間で、子どもたちは、メッセージに富んだこの絵本を、徐々に読み深めていっているのだと感じたひとときでした。

このように、絵本の読み合いのあと、子どもたちは思ったことや感じたことをおしゃべりし、そのあとは、おもしろかった場面や言葉などについて身体表現をして遊びます。

例えば、〇歳児クラスで『こちよこちよさん』（おーなり由予・ぶん はたこうしろう・え／講談社）を読んだから、手袋に目鼻をつけた製作物で赤ちゃんたちをこちよこちよすると、もっとやっていると喜んでくれます。

一歳児クラスでは、『たぬきのじどうしゃ』（ちようしんた・さく／偕成社）を読んだ、私がかえるの怪物になりすまし、脅すふりをする、子どもたちは怖がりながらも担任と一緒に、「ぼんぼんぶーぶー」と言いながら挑んできます。

二歳児クラスに『かたつむりののんちゃん』（高家博成 仲川道子・さく／童心社）を読んだときは、絵を見ながらおしゃべりをし、かたつむりになったつもりで、ゆっくり競争をして遊びました。

『だごだごころころ』（石黒漢子、梶山俊夫・再話 梶山俊夫・絵／福音館書店）を読んだ三歳児クラスでは、子どもたちから「遊びたい」と声が上がリ、オニ、トンボ、おばあさんになりきって遊び、その日、一番盛り上がったのは、だんこの粉

になった子どもたちと、魔法のしゃもじになった私とのやりとりでした。

四歳児クラスで『じごくのそつべえ』

(たじまゆきひこ・作／重心社) を読むと、すぐに子どもたちが遊びたいモードに入るのがお決まりです。そこで盛り上がるのが、じんどんきのお腹の中の場面や、ふんにようじごく等です。特に、ふんにようじごくでの糞の投げっこは、実際にはあり得ないことなので、解放感に満ちています。

こんなふうには、〇歳児のときから、絵本を読んでおしゃべりし、表現遊びを楽しんできた五歳児のぶどう組は、この一年の間も、春には『なまずのおやま』

(梶山俊夫・文絵／フレール館) に出てくるフレーズをみんなで節をつけて言いながら、絵本の世界に入り込んでいました。夏には『ともだちいっぱい』(新沢としひこ・作 大島妙子・絵／ひかりのくに) を読んだあと、保育園中のみんなに「ともだちのともだちはみんなともだち」のフレーズを伝えて回りました。秋には『みかんのつくりかたおしえます』(やまねもりこ、拓新太郎・作 宮西達也・絵／すずき出版) を読み、神様になりきった私が空からみかんジュースを降らせると、たくさん飲みたいと、寝転がって飲むふりをしていました。



劇に取り組む子どもたちの表情は真剣そのもの。客観的な意見も受け入れながら、どうしたらよりよい劇になるのかを考えながら取り組みました。

そして、卒園を前に生活発表会で披露する劇として、「お客さんに感動してほしい」と選んだのが『スーホの白い馬』(大塚勇三・再話 赤羽末吉・画／福音館書店) でした。この絵本も十二月に読んだ一冊だったのですが、そのときは競馬の場面が好きになり、みんなで保育園中を馬に乗ったつもりで駆け回ったものでした。

年が明け、いよいよ生活発表会に向けての取り組みが始まり、二月上旬に第一

回「みせあいっこ」の日がやってきました。この日は、物語の始まりの場面を作って練習した劇を、年少さんや年中さん、保育士さんたちに見てもらいました。

劇は、三人の子どもたちのナレーションで進行します。始まりは、スーホが毛布にくるんだ仔馬を抱く、草原の場面からです。場面は変わって、草原から帰る途中、おばあさんが三人の羊飼いに、スーホの行方をたずねます。三人はそれぞれのセリフを言い、スーホを探しに散らばっていきます。そして、スーホが白馬をかわいがる場面から、大きく育った白馬が、羊たちを守るために狼と対決す

る場面へ。そこで「今日はここまでです」と幕は閉じ、そのあと、見ていた大人たちとの交流の場を持ちます。ナレーションやセリフをよく覚えていたこと、堂々としていたこと等を褒められると、緊張がゆるむぶどう組のみんなでした。

しかし、「草原に吹く風はもっと大胆に」「三人の羊飼いとスーホの関係性が分からないので同じ役に見える」「羊や白馬を、もっとそれらしく見せる表現を考えて」等の意見を聞く表情に、真剣さが浮かんでいました。

聞けば、この絵本を劇にしようと思ったのは、「りんご組(四歳児クラス)」のとき、楽しい劇をやったから、ぶどう組はかっこいいのをやりたい」「感動するのをやりたい」「感動って何?」「すごいって思っ、泣いちゃう感じ」等、子どもたちが話し合ってためたのだそうです。そんな劇づくりのためには、客観的な意見も受け入れようとする、五歳児らしい心の育ちを感じ、うれしく思いました。

赤ちゃんのときから友だちと寝食をともにし、遊び、けんかや仲なおりをしながら、大きくなったぶどう組さんたちへ。小学校でも、たくさんのお友だちと、絵本や物語に出会えますようにと心から願っています。

『そうだったのか！ カタツムリとナメクジ』 刊行記念インタビュー

嶋田 カタツムリがあまりにもよろまだったので興味をもちました。カタツムリを飼ってみたかったのに、ひょんなことから、ナメクジを飼うことになって、飼ってみたら、すごくおもしろかったです。ずっと飼ってみたいですね。

はた ナメクジの本と聞いて、初めは大丈夫か！と思いました（笑） でも内容はおもしろい！ だからできるだけ気持ち悪いと思われないように、最初はもっとデフォルメして描いてみていたのですが、たくさん描いているうちに、どんどんかわいく感じてきて……。やっぱり、ぬめりやてかりがないと、らしくないと思い、結局てかりが加わりました。

嶋田 ありがとうございます（笑） さすがにナメクジを好きになってくれとは言いませんが、こういう生き物がなぜ地球に存在しているのかを考えるきっかけになってくれたらと思います。好き・嫌い・有用・無用といった人間本意の物差しで生き物を見ることへの怖さを、ずっと感じています。そうして生態系のバランスが崩れてしまった先の地球で、人間は生きていけるのでしょうか。

はた 虫なんて世の中からいなくなればいいのにと言う人がいますよね。本当にいなくなったら大変な影響がある。ぼくはそういう虫嫌いの人のことがずっと心にあって、少しでも生き物に親しみをもつ

嶋田 泰子

×

はた こうしろう

生き物大好きな、
嶋田泰子さんとはたこうしろうさんが、
生き物への想いを語ってくださいました。



てもらえたらいいなと思います。本を作っています。見て観察する、あるいは名前を知るだけでも不気味に思う気持ちがなくなると、身近な「知っているやつ」になるんですね。ぼく自身、今回ナメクジで体感しました。

嶋田 私も飼いはじめるとかわいくなってきました、名前をつけてしまいました（笑） 飼育ケースはできるだけ自然環境に近い状態にしてあげたくて、落ち葉や石、木を置いたりしました。ナメクジのケースは、すぐぬめつとなってしまうので、しょっちゅう洗っていたんですが、ケースに残っていたナメクジを洗剤につけてしまったりして……。私は生き物の専門家ではないので、飼育は本当に手探りでした。

はた それがおもしろいのだと思います！ 初めて体験したことや初めて見た驚きが子どもに伝わって、楽しんでもらえる。例えば雑木林に初めて入って嗅いだ匂いを、専門家の人は書かないですよ。でも、そういうことが子どもにとって大事だと思うんです。

嶋田 この本をきっかけに、子どもたちが生き物を偏見なく見るようになったらいいなと思います。



『そうだったのか！
カタツムリとナメクジ』

嶋田泰子／著 はたこうしろう／絵
定価1,430円（本体1,300円＋税10％）

あのころ このころ

作者の歩んできた人生や見てきた風景、子どもへのまなざしが、作品には込められています。創作の核となる幼少期の「あのころ」、そして作家として日々作品に向き合う「このころ」を、語っていただきます。

石川さんが出会ってきた本の数々。家族とのかけがえない思い出がそこにはあります。

石川えりこ（絵本作家） **後編**



ねる前に本を読んでもくれるのは、いつも父でした。
ワクワクする本は『うりこひめ』と『あんじゅとずしおう』。
どちらも父が役になりきって読んでくれるので
何度読んでもらってもハラハラドキドキ。
絵本は、何度も読むので
すり切れてしまいます。いつも
おじいちゃんが丈夫な糸で
とじ直してくれます。

本がなくなるまで
じーっと見ていたのを
よくおぼえています。



お給料日と、たんじゆ日や特別な日に父は、
私たちをつれて本屋さんへ行きました。

この日に一冊えらぶのはとても真剣です。

私は、じいっと棚に並ぶ本の背を見つづけます。
中にひそんでいる物語を想像しながら一冊を選びます。



この日もなかなか一冊選ぶことができず、
本棚の前に長い時間立ちすくんでいました。
気長に待っていた父が『がんくつ王』を指差して
「この物語を書いたのはデュマという人なんだよ。
デュマには大デュマと小デュマと二人いてね」と
教えてくれました。

ダイデュマ ショウデュマ
ダイデュマ
ショウデュマ
あまじない
みたいに
きこえるね

「大デュマと小デュマ」この言葉で、この日の一冊は
『がんくつ王』に決まりました。『がんくつ王』を書いたのは、どちらの
デュマでしょうか？ 本を読みあえたときに、答えと父が教えてくれました。
本が好きになるきっかけは、ちいさな頃の私の中に、いつもあるような
気がします。

いしかわえりこ 福岡県嘉麻市生まれ。主な作品に『あひる』（くもん出版）『ボタ山
であそんだころ』（福音館書店）『ほんやねこ』『カイト』（講談社）『かんけり』（アリス
館）『また おこられてん』『こくん』（童心社）など多数ある。



3月の新刊図書！

ももんちゃん あそぼう

ももんちゃん あっぷっぷ

とよたかずひこ／さく・え

定価990円
(本体900円+税10%)



きんぎょさん、さぼてんさんが、ほっぺをふくら
ませて、あっぷっぷ。ももんちゃんも……。

まねっこどうぶつえほん

まる！

得田之久／さく

北村人／え

定価990円(本体900円+税10%)



ぱんださんが……まる！ ねこさんもまねして
……。一緒にまねして楽しいあかちゃん絵本！

ロボットがおたすけ！ 大百科

①家でたすけるロボット

②町でたすけるロボット

③会社や工場で
たすけるロボット

④命をまもるげんばで
たすけるロボット

⑤外でたすけるロボット

日本ロボット学会・
子ども中心のロボティクス
研究専門委員会／監修
グループ・コロンプス／編

定価各3,080円
(本体2,800円+税10%)



光村図書の小2「国語」の「ロボッ
ト」単元に対応。写真での説明はもち
ろん、イラストのキャラクターどうし
の会話で、「どんなロボットか」「どん
なときに何をしていたすけてくれるか」
の課題にとりくみやすくしています。

まねっこどうぶつえほん

だーれ？

得田之久／さく

北村人／え

定価990円(本体900円+税10%)



わんわんわわん♪ うたってるのは、だーれ？
一緒にまねして楽しいあかちゃん絵本！

単行本絵本

せんせい みてて！

石井聖岳／作

定価1,540円(本体1,400円+税10%)



「せんせい みてて！」はなちゃんがそろりそろ
りと、いっぽんばしをわたります。すると……。

単行本絵本

おひるね とんとん

石井聖岳／作

定価1,540円(本体1,400円+税10%)



「ねえ、せんせい とんとんして」おひるねのじ
かに、たけくんがそういうと、せんせいは……。

2025年3月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第730号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話: 03(5976)4181
03(5976)4402(編集)
編集発行人: 橋口英二郎
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン: 坂本梓 ロゴ: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌(無料)と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただけます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

●紙芝居と出会い直す。少し前から
講習会では必ずこう伝えます。参加
者それぞれの立場における紙芝居へ
の今の意識と、初めて紙芝居を認識
したあの日の記憶。いつどこでどん
な紙芝居に出会ったか。児童文化と
大衆芸能、印刷・出版と手作り。そ
の縦軸・横軸の狭間で揺れ続ける紙
芝居の根本を共有し、現在地を示し
更新していきたいと思います。 ㊦

●童心社には創業より刊行してきた
紙芝居が保管されています。バック
ナンバーには、園で繰り返し読んで
もらった作品がいくつも。トルスト
イの『ななつのほし』、ジャンニ・
ロダーリの『チボリーノのぼうけ
ん』、アンデルセンの『雪の女王』。
いま読んで、隣の子と肩を寄せ合
い、お話の世界を旅した記憶が鮮や
かによみがえってくるのです。 ㊦